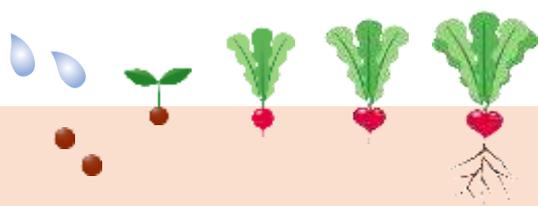


平成 29～30 年度

**地**域における**子**どもの**居**場所づくり

サポートモデル事業報告書



# はじめに

---

横浜市社会福祉協議会では、平成 29～30 年度に横浜市から「地域における子どもの居場所づくりサポートモデル事業」を受託し、磯子区・港北区をモデル区として、市内 18 区社会福祉協議会とともに居場所づくりを進めてきました。その中で、地域と子どもの日常的なつながり、気になる子どもの早期発見、新たな人材の発掘、商店や企業との関係構築など、様々な成果や課題が見えてきました。

居場所がその機能を発揮していくためには、立ち上げるだけではなく、地域に根付き継続していく中で、様々な関係機関がつながり、手を取り合いながら関わることが重要です。そのためには、区社協や地域ケアプラザなどの支援機関によるコーディネートは欠かせないものです。

本報告書は、居場所の立ち上げマニュアルではなく、区社協や地域ケアプラザなどの支援機関のコーディネート機能に焦点を当てたものとし、その役割や方向性を確認することを目的に作成しました。

地域づくりが進んでいくきっかけや方法は様々ですが、その中で「子どもの居場所」はとても有効なツールであることが 2 年間の取組を通じて改めて確認できました。そこで、「子どもの居場所」が生まれ、成長していく過程と、その中で必要な支援機関の関わりや、モデル区の取組によって地域が大きく変化してきた様子などをまとめました。私たち社協の職員自身も模索しながら進めてきた事業ではありますが、多くの地域支援に携わる皆さんと共有することで、今後の地域づくりについて考えるきっかけとなることを願っております。

また、本報告書を通じ、地域支援業務の見えづらい部分を可視化することにより、その意義を関係機関の皆さまにご理解いただければ幸いです。

令和元年 6 月 社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会

# もくじ

---

## 1 モデル事業の背景と概要

1 背景	1
2 市社協の取組	1
3 モデル区の取組（磯子区社協）	3
4 モデル区の取組（港北区社協）	5

## 2 居場所づくりの過程と必要なサポート

1 居場所づくりの過程	7
2 過程ごとに必要なサポート	8

## 3 居場所でのエピソードと今後に向けて

1 エピソード	11
2 今後に向けて	12

### 略字表記

この冊子では、  
次の用語については( )内の表示とします。

- ・市社会福祉協議会（市社協）
- ・区社会福祉協議会（区社協）
- ・地区社会福祉協議会（地区社協）
- ・自治会町内会（自治会）
- ・地域ケアプラザ（ケアプラザ）

# 1

## モデル事業の背景と概要

### 1 背景

市社協及び18区社協は、制度・サービスだけでは解決が難しい個別課題に着目し、地域住民とともに解決に取り組みながら、支援の仕組みを構築する視点を持ち、地域づくりを行ってきました。

「地域における子どもの居場所づくりサポートモデル事業（以下、本事業）」は、地域と関係機関が連携し、支援が必要な子どもたちに気づき、受け止め、支え合える居場所づくりを推進することが目的です。それには様々な人によるネットワークが必要であり、まさに社協が目指してきた地域づくりの方向性と同じと考えられたため、事業実施に至りました。

#### 事業概要

##### 【市社協】

- ・居場所運営に対する支援情報の調査収集
- ・関連取組情報の調査収集
- ・食の衛生管理等のための情報提供や研修会の実施
- ・手引き(P.2 参照)を活用した市域での支援

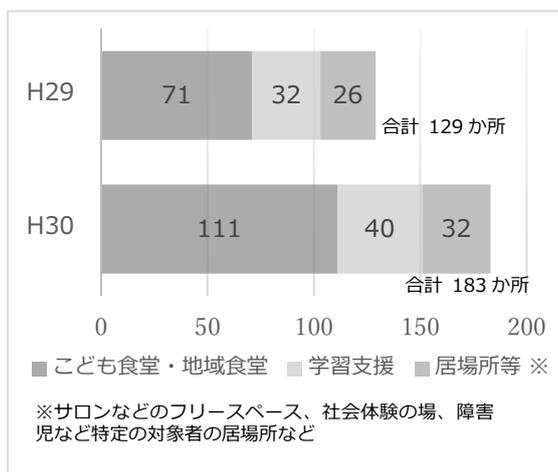
##### 【モデル区（磯子区・港北区）】

- ・居場所づくりの相談対応と課題の把握
- ・居場所の立ち上げと継続の支援
- ・団体同士のネットワークづくり
- ・食材の確保に関する支援
- ・居場所に関する講座の開催
- ・居場所づくりに関するコーディネート業務

### 2 市社協の取組

#### 1 子どもの居場所に関する状況調査（18区社協調べ）

##### （1）活動状況

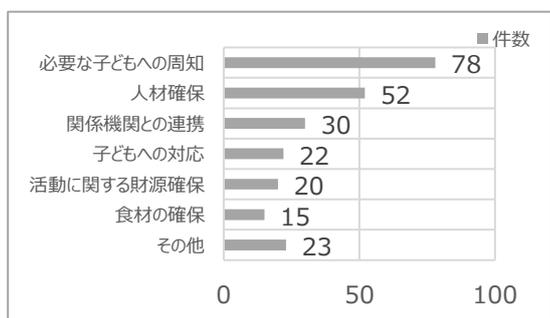


地域の活動状況及び課題を把握し、子どもの居場所の立ち上げや活動継続に必要な支援を検討することを目的に、対象を下記のとおり整理し、調査を行いました。

- ①子どもがひとりで来られる
- ②見守る大人がいる
- ③継続的な居場所・活動である

子どもの居場所は、子ども食堂・地域食堂を中心に、この2年で大幅に増加しています。さらに、この調査は18区社協による団体へのヒアリングを中心に行ったため、これまでつながりの薄かった活動団体と関係性を築くきっかけにもなりました。

##### （2）調査から見た課題



調査から見てきた課題の中では、支援が必要な子どもへの周知や、支援者側の人材確保が突出しています。続いて、地域や関係機関との連携、子どもへの対応等が挙げられています。これらの課題は、立ち上げ時に限らず、活動を続けている中で継続していく課題でもあります。

### (3) 区社協が行う支援の状況

調査内容	結果
子ども支援に関するネットワーク会議の設置数	25 か所 (16 区)
子ども支援に関する研修の開催数	15 回 (14 区)
子どもの居場所に関する区社協独自の助成金設置数	7 区

多くの区社協が居場所を支えるネットワークづくりに取り組んできたことで、新たに居場所づくりを行う団体同士や関係機関のネットワーク会議が立ち上がり、情報共有や課題の検討が行われています。

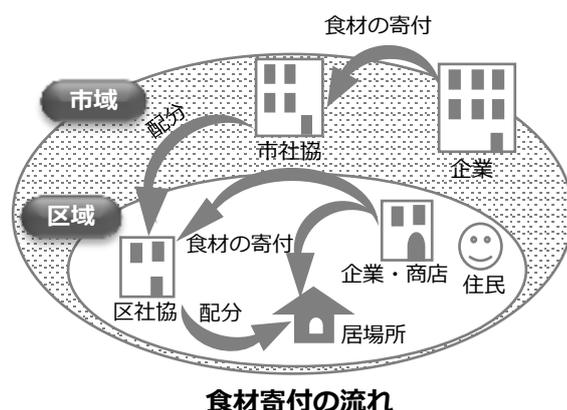
また、研修会などによる活動の後押しや、募金や寄付を財源とした新たな助成金の創設にも取り組んでいます。これらは、区社協が多種多様な団体・機関とつながっていることや、寄付を募り配分できる機能を持っているからこそできたものと考えています。

## 2 食材確保の仕組みづくり

子どもの居場所の多くは、食事を提供する「子ども食堂」のため、食材確保は継続的な課題です。

各区では、地元商店や企業と住民が連携した食材確保の仕組みづくりを行っています。

また、市社協でも市域で寄付を循環させる新たな仕組みづくりに取り組んでいます。(右図参照)



## 3 職員の育成

社協はこれまで、学齢期の子どもへの支援が比較的少なかったため、まずは職員が子どもの置かれている状況や関係機関の役割を理解することから始めました。また、以下のように、区社協と市社協が運営するケアプラザ職員を対象とした会議や研修を行い、市内の先駆的な活動や支援機関の関わりなどについて学ぶなど、組織全体の意識共有に取り組みました。

- (1) 区社協担当者会議
- (2) 区社協職員と市社協運営ケアプラザの地域活動交流コーディネーター合同担当者会議・研修会

## 4 啓発事業の実施

子どもの居場所が広がっていく中、その意義を再確認するため、子どもが置かれている現状や子どもの声を受け止める身近な地域の居場所の大切さを伝える機会として、次のとおり、市民向けセミナーを開催しました。

### 市民向けセミナー「私たちの町を子どもたちの居場所に」

日時：平成 30 年 2 月 7 日 (水) 13:00~16:30 場所：はまぎんホール  
 内容：基調講演 NPO 法人 フリースペースたまりば 理事長 西野博之氏  
 実践報告 ①泉区 フリースペースいずみ ~コミュニティしんばし~  
 ②港北区 師岡子ども学習会 ③磯子区 わいわい食堂



## 5 手引きの作成

「子ども食堂・地域食堂」を始めたい方のための、手順・運営方法のガイドラインとなる冊子を、横浜市こども青少年局と協力し作成しました。

区社協に子ども食堂立ち上げの相談が寄せられた時や、区内の各種会議・研修をはじめ、高齢者食事会などの他分野の団体にも幅広く活用されました。



## （背景）

本事業が始まる前、磯子区内には子ども食堂が一つもありませんでした。そこで、まずは思いのある住民の声を形にするために、区と協働でワークショップを開催。やってみないと、どんな子どもが来るのか？地域の課題は何か？が見えてこない！と、まずは動きながら、地域に根付いた子どもの居場所について考えてきました。

ワークショップに参加したみなさんはやる気のある方ばかり。子どもたちのために、わが地域のために何かしたいという気持ちを大切に育みながら、プレ実施の「子ども食堂☆ワントライ」を経て子ども食堂の開設に至りました。

## 区社協 VOICE

## Point 1 : きっかけとなるイベントの開催

## 子ども食堂ワークショップの開催（区役所共催）

第1回：平成29年2月21日開催。講師を招いて子どもを取り巻く状況について学びを深めるとともに課題抽出を実施。

第2回：3月7日開催。参加者21名。前回出されたアイデアを共有し、自分たちができることについて話し合いを行いました。あわせて、プレ実施として限定的に子ども食堂をやってみることを提案。

## 子ども食堂☆ワントライ：

5月25日開催。

中学生等29名が参加。



30名が参加した会場は熱気に包まれていました。

地域活動経験者だけでなく、様々な方々が参加くださり、改めて地域住民の行動力と熱い想いに身が引き締められました。

この絶好のチャンスを逃すわけにはいかない！そう思いましたが、経験や想いもそれぞれのみなさんを即グループ化し、実施に踏み切るには不安要素も少しありました。

そのため、ボランティア希望のみなさんと話し合いを重ねながらワントライを実施。

結果、やればできるかも…と想像していただけになり、グループ化も実現し、本格稼働に向けて動き始めました。

## Point 2 : グループ運営の支援

## ●企業等へのアプローチ

区社協が持つネットワークを活かし、区内のスーパーや商店、企業、ライオンズクラブ等に子ども食堂支援を呼びかけた結果、継続的な食材寄付等の支援を約束して下さった所も多数ありました。

また、区社協だけではなく、ケアプラザや各団体も常にアンテナを張りながら近隣の企業等にアプローチして、支援の輪が確実に広がっています。

## ●サロン事業助成金の創設

皆さまから頂いたご寄付を原資に小地域で展開しているサロン等の事業で活用できるよう新たな助成金制度を創設。食材にも活用できる助成金にしたことから、子ども食堂を含めた身近な地域でのつながりづくりに活用いただいています。

活動を継続するためには資金、場所、食材の確保が大きなカギとなります。

そのため区社協職員は、寄付にご協力いただける企業等がないかも意識して地域に出向くようにしています。

一方で、企業側にとっては様々な団体から常に寄付の協力を打診されるのは煩雑すぎるのでは？と考え、できる限り区役所や区社協が間に入り取り扱うようにしています。



区社協にフードドライブ（※）の「回収BOX」を常時設置し、いつでも寄付ができる仕組みづくりを行いました。結果、29年度にご寄付頂いたお米は「280キロ」。とても助かっています。

## ※フードドライブ

家庭で食べきれない食材を学校や職場等に持ち寄り、それらをまとめて地域の福祉団体や施設、フードバンク等に寄付する活動です。

## Point3 : ネットワークづくり

### ●子ども食堂ネットワーク連絡会

現在区内には7つの子ども食堂があるため、一堂に会して、情報交換を実施しています。資金、場所、周知や担い手の確保等、活動を進めていく中で出た課題や情報を共有しています。

連絡会でつながることで、日頃の活動をお互い見学に行ったり、特技ボランティアを紹介しあったり等、横の広がりも出ています。

また、市社協を通じて寄贈いただけるセブンイレブンの物品(※1)や、その他住民や企業からいただいた寄付は、随時連絡会メンバーに連絡し、配分を行っています。

### ●研修会の実施

連絡会の冒頭でミニ研修会(情報提供・共有)を実施しています。テーマは「生活困窮者自立支援制度について」「食中毒発生状況」「要支援児童のフォローについて」等子ども食堂を運営する上で知っておいていただきたい情報をお伝えしています。

このほかに、外部講師をお招きして「“子ども”にとって“地域”にとっての、子ども食堂に大切なこと」の研修会も実施しました。

### ●磯子事業会(※2)との連携

区役所が、区内の様々な企業で構成されている「磯子事業会」と包括連携協定を締結しました。

事業会が、子ども食堂の支援を検討してくださっていたため連絡会にお招きし、懇談会を実施。区内の企業と新たなコラボが期待できる結果となりました。

※1 平成30年4月に市・市社協・セブンイレブン・ジャパンで、閉店(移転・改装を含む)店舗商品の寄贈を受ける協定を締結。区社協も配分を受けています。

※2 磯子事業会は、磯子区内の様々な業種の企業が会員となり、主に地域振興と企業の発展、業種の壁を越えた地元企業間の連携関係を図ることを目的として、昭和48年に設立された団体です。



(研修会の様子)

## 区社協 VOICE

磯子事業会の方との懇談時、各子ども食堂にどんな支援を必要としているか要望を出してもらいました。

すると、資金面だけではなく、企業で働く社員の経験談(特に海外赴任されていた方の話)等をお話しして欲しいとの意見が多数出されました。

子どもたちが自らの将来に夢と希望を持ち、どういう大人になるのかを描けるような支援をしたいというボランティアのみなさんの思いを強く感じ、食支援だけでなく子どもたちの未来を見据えた支援をしようとしていることに胸を打たれました。



(活動の様子)

## 区社協の思い・これからの展望

2年前は1つもなかった磯子区内に、いまや7か所の子ども食堂があります。すべての食堂の立ち上げに区社協が関わってきたわけではなく、ケアプラザや区役所等様々な関係機関が住民の思いをカタチにしてきた結果だと思えます。

子ども食堂ができたことで、スクールソーシャルワーカーと連携し、支援が必要な子どもに手が届いたこともあります。孤立していた保護者が子どもと一緒に来ることで地域とつながれたという声も聞かれましたし、担い手側もボランティア活動することでご自身の生活が豊かになったとおっしゃいます。

ただ、この居場所ができ、そして継続実施した結果、関係性が構築できたことで新たに見えてきた課題もあります。

その課題はボランティアで解決できることもあれば、専門機関に関わってもらいながら長期的にみていかなければならないものもあり、その判断は難しいこともあります。子ども食堂が課題解決の場となることもあれば、課題発見のチャンスにもなります。それを十分認識し、担い手であるボランティアの皆さんと協力しながら、課題解決に向け、区社協は様々な関係機関や人とつながりながら継続支援をしたいと思っています。

お腹が満たされたら次は勉強! 学習支援の必要性に気づき、次の一步を踏み出す団体も出てきそうです。



(平成30年度 磯子区社協職員一同)

## （背景）

港北区では従来から NPO 法人をはじめとして、子育て支援に関する活動が活発に行われていました。しかし、未就学児（子育て）の居場所は多いものの、学齢期以降の児童は地域との関わりが少ないことが課題でした。個人情報保護の問題から、隣近所の家庭の様子が以前より見えづらくなった、との声も聞かれました。

地域では「子ども食堂」をはじめとした居場所への関心の声が増え始めていましたが、必要とする子どもが実際にどれだけいるのか、実態が把握しづらいことから、意義や必要性がわからない、といった声も多く、具体的に形にすることが難しい現状もありました。

そこで、まずは地域の関係団体にモデル事業の目的を丁寧に説明していくことから始めました。また、区民向けのセミナー、フードドライブ等参加型のイベントにより啓発活動を行いました。検討を始めた団体に向けては、趣旨・目的の明確化や運営方法等、企画から協力することで、地域への理解促進に努めました。それらの基盤づくりを通じて、徐々に取組が広がっていきました。

## Point 1 : 地域へ向けた広報・啓発

## ●関係団体へモデル事業について説明

・地区社協、地区民生委員児童委員協議会をはじめ地域の関係団体へ事業の趣旨を説明しました。

## ●広く住民へ伝える

- ・食の支援フォーラム（かながわ生き生き市民基金への協賛）の中で「虐待防止研修」を開催しました。
- ・「現代の相対的貧困」「子どもの居場所の意義」をテーマに区民向けセミナーを2回（年1回）実施しました。また、区内の活動の紹介を併せて行いました。
- ・区内の居場所活動を調査し、一覧にまとめました。  
※平成30年11月時点で26団体を掲載
- ・区民フォーラムで事例発表、居場所一覧の配布、広報誌を活用した啓発等を行いました。



(区民向けセミナー)



(区民フォーラムの様子)

## ●参加型のイベント

- ・社会福祉大会会場でフードドライブ（※P.3参照）を実施しました。また、区内ボーイスカウトが実施したフードドライブに協力しました。  
集まった食品は、地域で必要とする団体へ配分しました。

## 区社協 VOICE

当初は「子どもの居場所？子ども食堂？うちの地域にはそんな必要な子どもはいないよ。」といった声も聞かれました。メディアの影響もあり、居場所=貧困=子ども食堂というイメージが浸透しているようでした。「月に1回の食事で何の助けになるの？」といった声もありました。

子どもを取り巻く環境は非常に複雑化しており、問題は経済的な貧困だけではありません。隣近所の顔が見えづらくなっている中で、様々な課題を抱えた子どもを地域で見守るための居場所が求められている、ということを説明してきました。

港北区にはエネルギーな担い手の方がたくさんいます。

取組への理解が進むにつれて徐々に活動が広がっていきました。



樽町		地域食堂
活動名	樽町なごみ食堂	
住所	樽町1丁目22-46 樽町地域ケアプラザ	
開催	毎月1回 17:30~19:30	
対象	樽町地区に在住の方	
主催	樽町なごみ食堂実施委員会	

(子どもの居場所一覧の作成)

## Point2 : 地域に寄り添った立ち上げ支援

地域の団体やケアプラザと連携し、地域食堂等地域の特性に応じた居場所の立ち上げと継続を支援してきました。



(地域の活動の様子)



## 区社協 VOICE

地域に気になる子どもがいたことがきっかけであったり、まずはやってみよう、と行動が先であったりと、立ち上げの経緯は様々でした。

いずれのケースでも、どういった居場所がよいか、地域の方々と一緒に悩み、学びながら進めてきました。

無理をせず小規模でも長く続いて、愛される活動となるように検討を重ねました。

子どもの居場所が子どもだけの居場所である必要はなく、多世代が集まる場を作れば自然と交流が生まれ、子どもの見守りにつながる、という考え方で活動を始めた団体もあります。

食堂に関しては、野菜を提供して下さる農家さんからの寄付や、住民からの寄付も寄せられるようになりました。

会員向けセミナーで食の支援をテーマに取り上げたことをきっかけに、関心のある方が集まって近況報告や意見交換を行ってきました。

ちょうど子ども食堂がメディアで盛んに取り上げられ始めた時期で、地域の団体から民間企業まで様々な立場の方が関心を持ち、参加いただいたことで徐々にネットワークの輪が広がっていきました。

その中のテーマの一つに「フードロス」が挙げられます。問題に対して何か行動に移してみよう、ということで、フードドライブを実施しました。その結果たくさんの寄付をいただき、関心の高さを実感しました。

## Point3 : ネットワークづくり

「食の支援に関する意見交換会」を平成 28 年から年 4 回開催しました。※平成 31 年時点で 33 団体が参加

主なテーマ：

- ・活動を立ち上げるにあたっての工夫
- ・衛生管理、子どもの安全の確保について
- ・食品衛生、活動団体の取組紹介、フードロスについて
- ・食材確保の仕方

→「社会福祉大会・区民フォーラム」の会場にて、意見交換会のメンバーとフードドライブを実施



(フードドライブの様子)

平成 29 年から年 1 回実施し、たくさんの寄付をいただきました。

## 区社協の思い・これからの展望

2か年にわたりモデル事業に取り組んできましたが、居場所の相談先として区民の皆さまに認知してもらえるようになってきたと実感しています。また、取組を通じて団体同士のネットワークが生まれ、つながりができました。

しかし、それが地域特性や課題に応じた形となり、定着していくにはまだまだ時間が必要です。

職員が一丸となり、引き続き子どもの居場所の啓発と、活動支援に取り組んでいきたいと思っています。



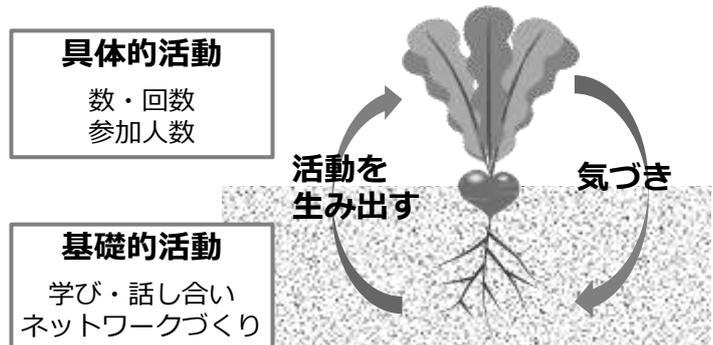
(平成 30 年度 港北区社協職員一同)



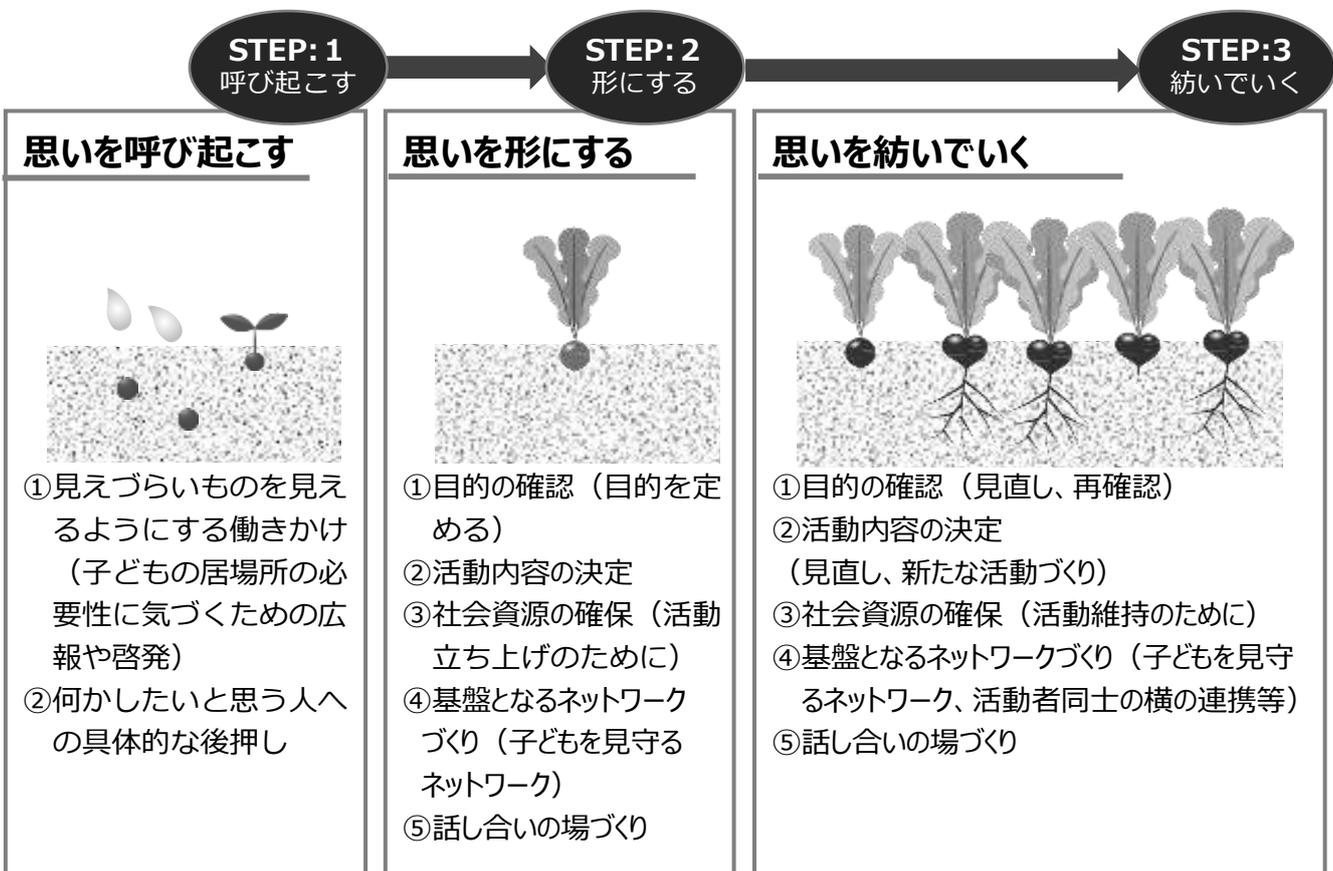
## 1 居場所づくりの過程

モデル区の実践からも分かるように、居場所づくりの過程は、始まり方も進むスピードも全く違います。居場所の数・回数・参加人数などの目に見える部分の活動だけでなく、その居場所によって、地域で子どもを見守り支えあえるネットワークが育っていくことが一番大切なことです。

居場所づくりは、地域住民の子どもに対する「思い」が種となり形となっていく過程でした。その「思い」が形になるには、関係する人同士が学び、話し合う場が必要です。学びや話し合いから活動が生まれ、活動から得られた気づきをもとに話し合い、このサイクルは循環していきます。



この章では、居場所づくりをサポートする区社協やケアプラザなどの支援機関の役割について、「話し合い」をベースとしながら、地域住民の思いを「呼び起こす」「形にする」「紡いでいく」という3つのステップに沿って整理しました



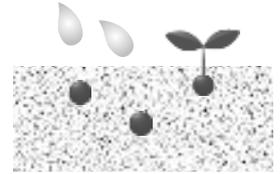
## 2 過程ごとに必要なサポート

### (1) STEP 1 「思いを呼び起こす」



#### ① 見えづらいものを見えるようにする働きかけ

子どもの課題は地域では見えづらいものです。7人に1人が貧困と言われますが、実際の地域の生活の中で「貧困」が見える場面は少なく、経済的な困窮だけではない複雑な課題はさらに分かりにくいものです。地域では乳幼児や高齢者に比べ学齢児を対象とする事業が少ないことや、「子どものことは親の問題」と捉えがちであったりします。また、子どもは、自分の苦しさを人には見せずに抱えていることも少なくありません。



目に見えないものを「自分ごと」として捉えることは難しいことです。そこで、多くの区社協は、「子どもの貧困」というキーワードに縛られず「地域で子どもたちのために何ができるか？」という基本に立ち返ってイメージを広げたり、研修やイベントを通して「自分ごと」として感じられたりする機会を作ってきました。こうした働きかけには、日頃からの地域との信頼関係や、地域の状況や課題を把握していることが大切となります。その結果、地域からは「実は地域で見かける子どもの様子が気になっていた」「何かできることがあるはず」といった声が増えてきました。

#### 【具体例】

- ◆ 地域での話し合い：民生委員・児童委員、主任児童委員、地区社協、地区連合自治会などで、子どもの課題について話し合う機会を持つ。
- ◆ フードドライブ（※P.3 参照）：イベントなどで家庭に眠っている食材の寄付を集める取組。寄付を通して苦しい状況にある人がいることを知る啓発にもなる。
- ◆ 研修：スクールソーシャルワーカーなど子どもの状況を理解している方から学ぶ。
- ◆ 課題の見える化：その地区のデータなどの整理
- ◆ 広報誌：子どもの課題を知らせる。

#### ② 何かしたいと思う人の具体的な後押し

一方で、テレビや新聞の影響で、「困っている子どもがいるなら何かしたい！」と痛切に感じている人も大勢います。仲間を集めて活動を立ち上げる人もいますが、一体何から始めてよいのか立ち止まってしまうことの方が多いのではないのでしょうか。

場所や資金、人手の確保はどうするのか？そもそもどうやって子どもに呼びかけたらよいのか？一度始めたらやめられず、取り返しのつかないことにならないか？といった不安がよぎるのは当然のことです。また、何かしたいと集まってみても、実際に話し合うとイメージがバラバラであったりします。

そこで、区社協はその地域の地区社協や自治会などを交えて話し合ったり、実際に活動している他地区の事例を共有したり、活動を始めるにあたってのワークショップの開催などを行い、具体的な後押しを行っています。

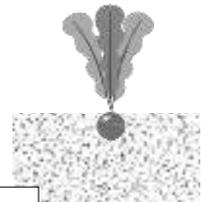
## (2) STEP 2 「思いを形にする」



住民から出てきた思いを、地域のキーパーソンや同じ思いを持つ仲間と共有し、具体的な形にしていく段階のポイントについて、以下のように整理しました。

### 区社協の関わり[立ち上げ支援]

※P1 子どもの居場所に関する状況調査より



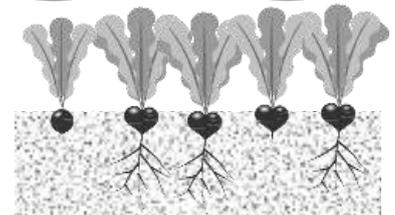
あり 66件,36%	なし 113件,62%	不明 4件,2%
------------	-------------	----------

支援のポイント	内容
① <b>目的の確認</b> (目的を定める)	<p>まずは「何のために居場所を作るか？」という目的の確認が大切です。始めは「子どもの貧困」にターゲットを絞っていたのが、話し合ううちに、「必要な子どもに届くには入口を広げた方がよいのでは？」と、「誰でも来られる地域の居場所」へと変更した団体もあります。</p> <p>支援者は、必要に応じて話し合いの場を作ったり、地域の子どもの状況を伝えたり、他地域の活動の見学や学習の場を調整したりするなど、目的を定めるために必要な関わりをします。</p>
② <b>活動内容の決定</b>	<p>場所、回数、対象、利用料、周知などの具体的な活動内容を一緒に考えます。常に①に示すとおり目的を確認しながら、必要に応じて他の実践事例の情報提供なども行い、継続可能な方法を一緒に考えます。</p>
③ <b>社会資源の確保</b> (活動立ち上げのために)	<p>②を達成するための場所や物品、資金などの社会資源の確保について一緒に考えます。区社協などの助成金を活用する他、新たな協力者や寄付者を募ったり、ボランティアの募集や研修などについても一緒に企画したり、無理なく活動できる方法を一緒に考えます。</p>
④ <b>基盤となるネットワークづくり</b> (子どもを見守るネットワーク)	<p>活動者の思いを自治会や地区社協などの地域のキーパーソンへつなぎ、居場所活動協力者の提供を得たり、周知の協力を得たりします。具体的な協力だけでなく、キーパーソンに活動を認識してもらうことが大切です。</p> <p>学校などの子どもに関わる機関ともつながり、居場所の情報を周知してもらったり、その地域の子どもの情報を教えてもらうなど、活動の基盤となるネットワークを作っていきます。</p> <p>支援者の日頃からの幅広いネットワーク力が活きる場面です。</p>
⑤ <b>話し合いの場づくり</b>	<p>活動者やその仲間、地域のキーパーソンと、ケアプラザ・区役所・区社協などの支援者が、思いを共有する場は大切です。支援者は、日頃から築いた地域のネットワークを通じて、話し合いの場を作り、今ある機会を活かして、ともに話し合っていきます。</p>

### (3) STEP3 「思いを紡いでいく」



継続する中で起こるできごとや気づきに向き合うことで、居場所は地域に根差した力強い活動へと成長していきます。



#### 区社協の関わり[継続支援]

※P1 子どもの居場所に関する状況調査より

あり 97件,53%	なし 86件,47%
------------	------------

支援のポイント	内容
①目的の確認 (見直し、再確認)	<p>活動を始めてみると「子どもはたくさん来るが、本当に困っている子が来ていない」など、当初イメージしたものと違うことも起こります。しかし、日頃から地域の大人がつながっておくことで、子どもに何かあったときに気づける可能性もあります。</p> <p>どのような居場所を目指すのかという目的の再確認や、時には目的の変更が必要な場合もあります。</p>
②活動内容の決定 (見直し、新たな活動づくり)	<p>当初目指したものと結果が違う場合、場所やプログラムなどの内容の変更が必要となる場合もあります。また、新たに見えてきた課題への対応に向かっていくこともあります。</p>
③社会資源の確保 (活動維持のために)	<p>食材や資金、担い手の確保は、継続していく時にこそ課題となる場合があります。一方で、「子ども」「食」というテーマだからこそ、地域活動にボランティアや商店などが協力をしてくれる場合もあります。居場所を通して地域全体のつながりが深まるよう支援を行います。</p>
④基盤となるネットワークづくり(子どもを見守るネットワーク、活動者同士の横の連携づくりなど)	<p>居場所には、ルールを守れない子や、文化や国籍の違いでコミュニケーションが取りづらい子、学習が遅れがちな子など、配慮が必要な子や、関わるうちに課題が見えてくる子どももいるかもしれません。居場所だけですべてを背負うのではなく、必要なときに専門職や地域の自治会などつながることができるネットワークも大切です。</p> <p>また、区内の活動団体同士で運営面の情報交換や、学校や区役所などの専門職との、サポートが必要な子どもを見守るネットワークがあると、支援の網が広がっていきます。</p>
⑤話し合いの場づくり	<p>新たな課題や気づき、メンバー同士の意見の相違、モチベーションの低下、想定外のできごとなど、様々なことが起きます。その時に団体だけで抱え込まず、必要に応じて専門職や地域の支援も受けながら、何度も話し合い続けていくことが必要です。多くの居場所に共通する課題もあるので、支援者は他地区の事例などを共有し、話し合いを支援します。</p>



# 居場所でのエピソードと今後に向けて



## 1 エピソード

活動の原動力は、「子どものことを放っておけない」「何かしなくては」という想いです。

「〇%が貧困」といったデータだけでなく、実際に会う子どもたちや、嬉しさや切なさを感じる小さな出来事の積み重ねこそが、活動者たちの心をつき動かす力となっていました。

そこで、ここではそれらのエピソードの一部をご紹介します。

### 今まで地域では出会わなかった 人たちの **出会い**

- ・社会的に孤立しがちな父子家庭や、文化の違いに生きづらさを感じている外国籍の方とのつながりができた。
- ・高齢者夫婦で食事を取りに来られる方。年金だけでは生活が厳しいことが見えてきた。
- ・近所に住み、勤労している一人暮らしの方がボランティアに。

### **喜び**を感じた 子どもたちの**変化**

- ・ひきこもり気味の中学生が調理に参加して、社会参加や交流の場になっている。
- ・外国籍で日本語が分からなかった子が分かるようになり、人前で話せるようになった。
- ・学習に集中できなかった子が、少しずつ問題が解けるようになってきた。

### 出会いで開かれた **新たな扉**

- ・スクールソーシャルワーカーが居場所を見学し、活動や雰囲気を知ったうえで、ひきこもりがちな子どもに情報を届けてくれた。
- ・ケアプラザが、居場所に来ている子どもたちの様子を学校に報告。すると、学校が「福祉学習」に興味を持ち授業に取り入れた。
- ・居場所に関わるうちに、民生委員・児童委員さんが、高齢者以外でも子どものことをケアプラザに相談してよいのだと気づいた。
- ・共働きでつながりが持ちづらい保護者同士の接点の場になり、学童保育の先輩役員と知り合ったことがきっかけで役員になった。

### 子どもへの想いが **地域を変えた**

- ・子どもと顔を合わせた老人会メンバーが、「子どものために何かしたい」と子ども神輿の作成に立ち上がった。
- ・市民農園を運営している方が、食堂に野菜を寄付してくれるようになり、趣味の活動が地域に役立てられた。
- ・地域の男性たちが中心となり、居場所が終わる夕方の時間に、見守りボランティアとして巡回活動を開始した。



## 2 今後に向けて

様々な居場所の活動を見ていく中で、単なる「場所」ではなく、地域の人々が交流し、信頼し合える関係性を育み、参加者一人ひとりの自己実現やその人の持つ力を発揮できる、「気持ちの拠り所」にもなっていることが分かりました。そこに集う参加者同士で作り出す雰囲気や関係性によって感じられる安心感や充実感こそが、本当の意味での居場所の意義と言えます。

そのため、活動資金や場所、物品といった具体的な手段の確保だけでは終わらず、何かあった時に助け合える関係性の構築まで、活動者に寄り添い、支え続けていくことが必要になっていきます。

その過程で住民同士が話し合い、気づきを得て活動を力強く進化させていくことで、地域で子どもを見守る仕組みづくりがさらに進むきっかけにもなります。

このような過程を振り返る中で、居場所づくりを進めるうえでの今後の取組を以下のとおり2点に整理しました。

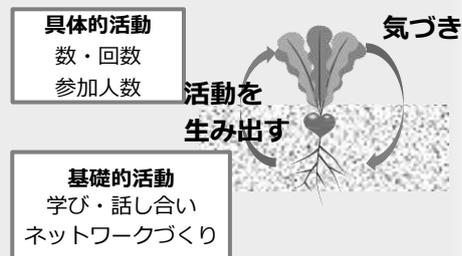
平成30年度でモデル事業は終了しましたが、下記のポイントを意識し、今後も地域づくりの一環として地域の方や関係機関と協力しながら地域の居場所を支援していきたいと思えます。

### 居場所づくりを進める上での今後の取組

**参加者一人ひとりに向き合う意識を持ち、**

**活動者に寄り添い続けていく**

活動者のみなさんが、一人ひとりの子どもたちに向き合い、状況を汲み取り、困りごとを抱えている場合には、その解決に結び付けていけるよう支援していきます。また、活動者の気づきや喜び、やりがいなどを共有する精神的な支えになるとともに、支援者の育成や運営に関する情報提供等、基盤整備についての支援に引き続き努めていきます。



**社協の持つネットワーク力を活かし、**

**子どもを見守る仕組みづくりをさらに広げていく**

日常的に身近な地域の中で子どもを見守ることで、異変に気づき、相談できるような関係性の構築につながる居場所づくりを目指していきます。

社協は、行政や関係機関・地縁組織・ボランティア等との幅広いつながりが日頃からあります。それらを活かし、地域全体で子どもに関わり、活動を支える仕組みの広がりや福祉への関心の向上等、環境整備を進めていきます。

## 地域における子どもの居場所づくりサポートモデル事業報告書

---

令和元年 6 月 発行

発 行 社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会

〒231-8482

神奈川県横浜市中区桜木町 1-1

横浜市健康福祉総合センター8 階

(地域活動部 地域福祉課)

TEL : 045-201-8616 FAX : 045-201-1620

<http://www.yokohamashakyo.jp>



ほら、  
よこはまは  
あったかい

この冊子は共同募金配分金で作成されました

